

一无所有地艺术

北基行 記

北京 798芸術区 壁に入口

“無一物”の“芸術”

資本主義世界の芸術文化は、腐敗してどこまで落ちてゆくのか、止まる所を知らない。近年西方で評判の、凶悪事件を扱う文学作品、戯曲、及び、のたうち回り、バカ騒ぎで創作する絵画や音楽など一連の“抽象派の芸術傑作”を眺めると、資本主義が瀕死状態にあって、まさに消えんとする、あの一瞬明るくなる最後の輝きのように思える。芸術的最高レベルの表現と云うが、その馬鹿さ加減はとうてい我々には理解できる代物ではない。ついこの頃、また西方で“無一物”という“芸術”の発表があったが、これにはまったく呆れかえった。

西独のニュースによると、最近ハンブルグで“無一物”の展覧会が開かれたそうだ。展示の、絵は書かれていない白紙の画用紙、未成型で泥塊の塑像作品、会場で上映の映画は、スクリーンに白い斑点が映っているのみであった。展覧会の案内書には、ここは無を展示していると説明していた。その新芸術家達が宣言した観客へのアピールはこうだ。“我々の展示物は無である。我々が無を展示し、会場で皆さんが無をお求めになるのだ。”この芸術展覧会は、資本主義芸術の終焉を象徴するもので、まさに葬

送の鐘が鳴り響いている最中である。

この展覧会を挙行政した芸術家達は、主観的願望はさておき、実際には資本主義的文化技術の内面を無情にも暴露しているのである。この芸術家等は、独占資本家に飼われている政治舞台上の端役よりも、よっぽど率直であり、勇敢である。西独の新聞がつぎのように認めている。“我が芸術家達が、他の領域の状況を、芸術手法で反映しようとする試みである。彼らの誠実さが新鮮にうつされている。一人の政治家が無を表現するときは、その振る舞いがあたかも一種の芸術と錯覚するように見える。しかし芸術家はそこを見える物体にしたてて、説明しようとした



北京 798芸術区 空を見る人

のが、この無なのだ。”

この西方の芸術家グループは、“無一物”なる真の世界を、作り出すには力不足で、資本主義世界の精神全貌を反映するにはほど遠く、更に徹底して“無”を追求する努力が求められる。中国で云う“百尺竿头更进一步”(百尺の長い竿、それを更に伸ばす)が必要である。特に、無と云いながら、彼らの展覧会には画用紙の白紙、練り上げていない泥塊、白い斑点が現れる映画フィルムを展示しており、ご丁寧に説明書まで作り、それに“無一物”なる説明字句がある。これではつまり“有”であり、どんな顔して“無”と云うのか。これからもお分りのとおり、彼らには徹底さが足りない。

彼らの所謂“無一物”の世界を作りだすことが出来たとしても、それは“有”の別種形式であるに違いない。ちょうど“無党派”といっても、それは“党派”の一種類であり、“政治色が無い”といっても、それが一種の政治色であるのと同じである。あの画用紙、泥塊、説明書等一切切取り払い、展示場を空っぽにしても、真の“無”とは言い難い。こう述べてくると、西方資本主義世界の芸術家たちは、外世界よりの嘲笑から逃避して、もっぱら自己満足に耽っているのかもしれない。

とはいえ、このような芸術は退屈極まりない。それが伝染病のようにあつという間に西方世界に瀰漫して、資本主義社会における次段階の取り返しのつかない病因になるだろう。この環境においては、青年若者がいちばん中毒にかかりやすい。現在西独の青年は、ほぼ全てが中毒患者といってもいいだろう。彼らは、“個性と表情を喪失した浮草世代”と呼ばれ、また“だめ世代”とも呼ばれ、もたえ苦しみ絶望の極点にある若者である。この種の精神状態は芸術においては必然的に虚無的な“無一物”として現わされるのだ。



北京 798芸術区 歩く人

芸術は往々にして社会とその時代を反映するもので、この種現象は疑いなく現在資本主義世界の重大な病状である。現在、西欧で流行する芸術表現形式は、どのような社会の本質と時代を反映しているであろうか。米国ロサンゼルス在住のホルハート・アベスハイム助教授が、西独の『文化新聞』の取材の応答で、次の様に述べた。“我々はすでに偉大な芸術世紀の終末に到達しており、未来を指向する有意義な作品が再生産できなくなったばかりか、すでに人類は、自発性的、芸術的、形象的表現生活への興味や必要性を消失したかの如くである。”

これこそ、世紀末資本主義世界の悲哀以外の何物でもない。資本主義の末日は目前に迫っている。それは、少数の独占資本家階級と彼らが統治する世の終焉に過ぎず、人類全体に至っては、この助教授が述べているまでには至っていない。それとは正反対に、資本主義の制度化で呻吟している広大な人民は、將に真の解放を獲得せんとしているのだ。

【掲載当時の時代考証と秘められたメッセージ】

「一無所有」の「芸術」ひとそえ

題名に括弧で括られた言葉が二つ並び、読む者を身構えさせます。しかし読み進めると、それほど堅くなるほどのこともないかな、と肩の力が抜けてくる感じがします。

一言で言うと、公式主義的な批評に終始しており、当時の中国からすれば、当たり前のことを当たり前の言葉で綴り、西ドイツの芸術家たちの潮流をけなした挙句、ロス・アンゼルス音楽副教授の言葉で締めています。

60年前のドイツ芸術が20世紀末に向けて退廃していた、などという事は当時の中国にとってどうでも良い事に思われます。80年前のドイツでは、パウル・クレーラも退廃芸術としてナチスに追放されていたわけで、その軌が外れた戦後派の芸術家たちが色々な試みをしただけのことのように思われます。

ただ、ここでの問題は社会主義中国の鄧拓が敢えてこのテーマを取り上げ、資本主義社会を批判する立場から模範的な批評を行った点にあるでしょう。もしかすると、誰にも文句を言わせない、落ち度のない公式主義的批評文とはこのように書くのだ、と言いたかったのでしょうか？

井上邦久

退廃芸術家とされた作家の一人
フランツ・マルクの『鳥 (Vogel)』(1914)

“一无所有”地“艺术”原文

资本主义世界的文化艺术，腐朽、堕落到什么地步了呢？近几年来，人们从西方的一大批充满凶杀事件的文学作品、戏剧、电影，以及用打滚、胡闹的法子创造的绘画和音乐等“抽象派的艺术杰作”中，已经完全可以看出资本主义垂死阶段的回光反照了。然而，我们还不曾理会这种文化艺术的登峰造极的表现。最近，西方世界又出现了“一无所有”的“艺术”，这才真是够呛了。

据西德的消息说，最近在汉堡举行了一次“一无所有”的展览会，展出的是一些空白的没有画过的图画纸，雕塑作品也都是些不成形的泥团，会上放映的电影也只是墙壁上白色的斑点，展览会的说明书写着：这儿是一无所有。那些新艺术家们向观众宣称：“我们显示一无所有，我们展览一无所有，而你们来买一无所有。”这个艺术展览会倒很直截了当的敲起了资本主义艺术的丧钟。

举办这个展览会的艺术家们，不管主观的愿望如何，实际上对于资本主义的文化艺术做了无情的揭露。他们比起垄断资本家雇佣的那一班政治舞台上小丑们，总算要坦率而勇敢得多了。西德的报纸承认：“我们的艺术家们只是把其他领域的情形，在艺术上做了一定程度的真实反映罢了。新鲜的是在于他们的诚实。一个政治家在显示一无所有时，看起来他所做的倒象是一种艺术，但是这些艺术家却明白地说明他们所提供的东西只是一无所有。”

不过，我却以为这一班西方的艺术家们还没有真正做到“一无所有”，还需要“百尺竿头更进一步”，“无”它一个彻底，才足以充分反映资本主义世界的全部精神面貌。而他们的展览会仍然展出了一些没有画的纸，也仍然展出了没有塑好的泥团，电影也还没有白色的斑点，并且仍然有说明书，上而还写着“一无所有”等字句，这毕竟还是“有”啊，怎么能说是“无”呢？由此可见，他们就还是很不彻底！

再说，他们所谓的“一无所有”，即便真的做到了，那也不过是“有”的另一种形式。正如说“无党无派”仍然是一种党派，说“没有任何政治倾向”也仍然是一种政治倾向一样。如果把那许多图画纸、泥团、斑点、说明书等等，统统收起来，只留下一个空空的展览室，也还不能说是真“无”。这样说来，在西方资本主义世界中生活的那班艺术家们，倒还可以自己安慰自己，聊以解嘲了把。

可是，这样的艺术毕竟是太无聊了，它象是一种恶性的传染病，迅速地弥漫了西方世界，成为资本主义总危机发展新阶段的不可救药的痼疾。在这当中，青年人特别容易受到毒害。现在西德的青年中，就有一班人完全中毒了。他们被称为“失去个性和表情的浮萍一代”，又叫做“被搞垮的一代”，他们苦闷绝望达于极点。这种精神状态在艺术上必然表现为“一无所有”。

这种现象无疑地是目前资本主义世界的严重病症。因为一种艺术往往是一个社会和一个时代的反映。目前西方流行的艺术表现形式，究竟是反映什么样的社会本质和时代内容呢？美国洛杉矶有一个音乐副教授，名叫格尔哈德·阿贝斯海姆，他在答复西德《文化报》的问题的时候，说过：“我们已经达到了伟大艺术世纪的末端，不仅会再产生有意义的指明未来的作品，而且看来人类已经失掉了自发地、艺术性地、形象化地表达生活的兴趣与需要。”

这真是资本主义世界的世纪末的悲哀啊！资本主义的末日就要到了。然而，它应该只是少数垄断资产阶级的人们和他们的统治的末日；至于说到人类、决不会象这位副教授所说的那样，恰恰相反，呻吟于资本主义制度下的广大人民必将得到真正的解放。